

宣教師の見た日本

—キリシタン時代の資料をもとにして—

駒沢大学講師 柳 堀 素 雅 子

はじめに

日本に初めてキリスト教が入ってきてから四五〇年が経とうとしている。生まれて初めて東洋の島国「日本」を訪れたカトリックの宣教師たちは、どのような思いで日本の土を踏んだのであろうか。幾多の困難を乗り越え、長い船旅を終えて、ようやくたどり着いた日本は、彼らにとって全く未知の世界であつたにちがいない。不安と期待を交えながら、宣教師たちは日本国内で宣教を進めていった。そうしていく中で、彼らは日本の文化、伝統、宗教、そして日本人の特徴をしだいに把握していった。それは自分たち西洋人とはあまりに違いすぎる、まったく正反対のものですらあるように見えた。

やがて豊臣秀吉のキリシタン禁教令に始まるキリスト教迫害と殉教の中で、彼らが命を賭して日本に伝えたかつたものは何であつたか、そして彼ら宣教師の伝えたものを守り抜いて現在にまで伝えている日本人キリシタンたちの思いはどのようなものであるのか。そしてキリスト教伝来の時代から鎖国を解くまでの日本が西洋人の目にはどのような存在として見えたのか、それらを解明することが本論文の趣旨である。

一、日本におけるキリスト教伝来と殉教の歴史

日本におけるキリスト教伝来は、一五四九年（天文十八年）、フランシスコ・ザビエルの鹿児島上陸に始まる。スペインの貴族の家に生まれたザビエルは、一五三四年、腐敗していたカトリック教界の再建、発展を図るために、イグナティウス・デ・ロヨラらによって創られた「イエズス会」の創立者の一人であった。

ザビエルは鹿児島に上陸した一年後、京に上り、朝廷、將軍、有力な仏教僧侶たちに会い、日本伝道の足がかりを築こうとしていた。しかし当時、日本は戦国時代であり、思うような布教活動ができなかったが、比較的情が安定していた中国・九州地方に布教の中心を置いた。

その後、ザビエルが中国へ渡ったあと、ザビエルが基礎を固めた中国・九州地方の宣教は、宣教師トレルスが継承した。

また一五六〇年（永禄三年）、宣教師ガスパル・ヴィレラは、將軍足利義輝に謁見し、京までの宣教の許可をもらった。

日本文化を高く評価し、西欧に紹介している宣教師ルイス・フロイスは一五六五年（永禄八年）、最初の京都入りをしている。

キリスト教が日本に入ってきた頃、足利時代末期と織田信長時代はカトリックの宣教にとってよい時代であった。これは天正少年使節がローマに派遣された一五八二年（天正一〇年）頃まで続く。

豊臣秀吉が大友宗麟の要請を受け、九州へ出発したのは一五八七年四月のことである。島津との戦いに勝利した豊臣秀吉は、七月二十四日に準管区長コエリヨにキリスト教に対する詰問を行い、同日付で突如、伴天連追放令を出した。秀吉のコエリヨに対する詰問は以下のようなものである。

一、なぜ、パードレたちはかくも熱心に人々に勧め、強制してキリシタンとするか。

二、なぜ、神がみと仏たちの寺社仏閣を破壊し、坊主たちを迫害して、彼らと融和しないのか。

三、なぜ、道理に外れているにもかかわらず、馬や牛を食べるのか。

四、なぜ、ポルトガル人は多数の日本人を買い入れて、奴隸として国外に連れ出しているのか。

そして秀吉の出した伴天連追放令の内容は次のようなものである。

第一 日本は神がみの国であるために、キリシタンたちの国からパードレたちが、悪魔の教えを説くために当地に来ることは、甚だ悪い所業である。

第二 彼らは日本の諸領国に来て、私たちをその宗派に改宗させている。そのために彼らは神がみや仏たちの寺院を破壊している。しかして、このことは人々がいまだかつてまったく見聞したことのないことである。

天下の君が、人びとに国や村や町および知行を与えたとしても、それは当座のことだけにすぎない。したがって、彼らは天下の法と定めを完全に遵守する義務を負っている。しかし下層の者たちがこれらに反して同様の騒擾を働くことは処罰に値することである。

第三 もし天下の君が、キリシタンたちの意志と意向に従ってパードレたちがその宗派に基づいて振舞うことを善しとするならば、先に述べたように、彼らは日本の教えを破壊していることになる。したがって、これは悪しきことであるので、余はパードレたちが日本の土地にいるべきでないと定める。このため、今日から二十日以内に自分たちの事柄を整理して自国に戻るべきである。もしこの期間に何者かが彼らに害を加えるならば、かの者はそのために罰せられる。

第四 ナウ船（ポルトガル船）はその取引を行うために来航するのであるから、それはまったく別の事柄である。取引は支障なく行うことができる。

第五 今後は商人のみならずインドから来る人びとは、神がみと仏たちの教えに妨害を加えない限り、誰でも自由に日本へ来ることができる。

豊臣秀吉の伴天連追放令に対して、イエズス会は宣教師のほとんどを西九州のキリシタン領主の保護下に移した。そして日本残留と布教活動を控えることに決めた。

また豊臣秀吉は、伴天連追放令を出したあとも宣教師をすべて追放したわけではなく、たとえば一五九一年二月に豊臣秀吉に謁見した宣教師ヴァリニャーノは、自重を条件に宣教師の長崎滞在を許可された。このヴァリニャーノによって、日本に近代教育と活字印刷、カトリック宣教の組織化がもたらされた。

同じ頃スペインからフランシスコ会が日本に参入してくる。フランシスコ会は、日本国内の事情をわきまえぬまま宣教を開始したため、摩擦が生じ、一五九六年、サン・フェリペ号事件が起こる。土佐浦戸に漂着したサン・フェリペ号の航海士の言葉として「スペイン国王は他の

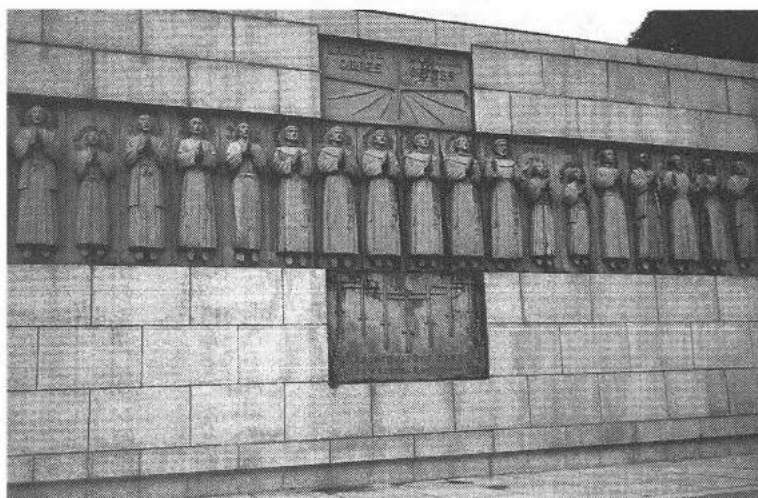


マリア観音（平戸観光資料館）

天正15年（1587年）、豊臣秀吉はキリシタン宣教師を国外へ追放したので、かくれキリシタンが大切にしていたマリア像はマリア観音となり、徳川時代に入って弾圧が厳しくなるにつれて、マリア観音はさらに変化をとりて納戸仏へと変わっていった。

王国の征服者であり、彼らはまず他国に修道者を入れ、その後につづいて軍隊を入れて征服するのであり、それを日本でもやろうとしているのだ」と報告を聞いた豊臣秀吉は激怒し、京都でフランシスコ会士六名を含む二十四名を捕えて長崎へ護送し、途中で捕えた二名を加えて、一五九七年二月に長崎の西坂で処刑した。これが歴史上有名な二十六聖人の殉教である。

徳川家康がキリスト教禁教政策を始めたのは大坂夏の陣（一六一五年）の直前である。そのきっかけになったのは岡本大八事件である。幕臣であったキリシタン岡本大八（生年不詳―一六一二）とキリシタン大名の有馬晴信（一五六―一六一二）との贈収賄事件が発覚したのは一六一二年である。一六一二年四月に岡本大八は処刑され、六月に有馬晴信も自害させられた。この事件を契機に一六一二年、徳川家康は幕府の家臣団に禁教令を実施する。ついで一六一四年に伴天連追放令を全国に通達し、三月に京都と大坂でキリシタンを迫害した。十月には有名



二十六聖人殉教の碑 一長崎 西坂

船越保武作 1962年完成

豊臣秀吉はペトロ・パブチスタ神父ら6人の外国人、20人の日本人信徒の処刑を命じた。26人は長崎の西坂で処刑され、1862年（文久2年）ローマ法王によって聖人に列せられ、100年目の1962年、船越保武作の記念碑が建てられた。

なキリシタンであった高山右近たちをマカオとマニラに追放した。さらに十一月にはほとんどの宣教師を日本から追放した。

二代将軍徳川秀忠はキリスト教禁教令を徹底した。

一六一六年に徳川幕府が出した「伴天連宗門御制禁奉書」は、「下々百姓以下にいたるまで、キリスト教を厳禁し、唐船からふねを除く、外国商船の入港を長崎・平戸の二港に限定する」ことを諸大名に通達した。

さらに徳川幕府のキリスト教禁教政策は、鎖国令として展開していく。三代将軍徳川家光が一六三三年に長崎奉行に与えた「覚」おぼえ十七条は、最初の「鎖国令」と呼ばれている。「覚」は、「奉書船以外の日本船の渡航禁止と日本人の海外渡航と帰国の禁止」「キリシタン禁制」「貿易の管理統制」を定めていた。

しかし一六三七年に長年の圧政に耐えかねた島原半島と天草諸島の農民一揆が起こる。農民一揆制圧後に、衝撃を受けた徳川幕府は一揆の原因をキリスト教だと考え、鎖国令とキリシタン取締りの徹底を計った。一六三九年にポルトガル船の来航を禁止した。これに



キリシタン墓碑（島原城）

現在、島原半島で発見されている墓碑は27基で、蒲鉾型、箱型、庵型、元庵型、平尾型、平型、薄型、自然石型等がある。

よつて日本とポルトガルの貿易は断たれ、オランダ・清・朝鮮以外の外国船の来航を禁じる鎖国体制が完成した。徳川幕府は農民一揆の後にキリスト教邪宗観の定着に努めた。キリスト教邪宗観とはキリスト教が世の害悪になるという見方である。そのために一六三八年に諸大名に宗門改めの強化を命じ、キリシタンの訴人を奨励した。一六四〇年にはキリシタン探索を組織的に行うために、寺請制度を利用して宗門改めを強化した。寺請制度とは、檀家がキリシタンでないことを寺に証明させた制度である。

日本が鎖国をしていた時期に、密入国を企てた宣教師がいた。しかし彼らのほとんどが入国に失敗した。潜伏キリシタンも各地で摘発された。一六五七年には肥前の大村藩で多数のキリシタンが検挙された。一六六一年には、尾濃^{ひの}地方で一三〇〇名のキリシタンが検挙された。

二、宣教師たちと日本

(1) ザビエルの見た日本

フランシスコ・ザビエルは、フランスとスペインの国境付近にあったナヴァラ王国の出身である。父は宮廷顧問官、母は城主の娘であった。しかしナヴァラ王国は、ザビエルが九才の時、スペインに滅ぼされてしまう。父も王国に殉じて亡くなり、母の手で育てられたザビエルは、一五二五年、パリにあった聖バルバラ学校に入学する。そして一五三四年、イグナチウス・デ・ロヨラとともにイエズス会を創設した。

ザビエルがポルトガル王ジョアン三世の要請を受けて、インド布教に出帆したのは一五四一年のことである。そして一五四七年、マラッカで鹿児島出身の日本人ヤジロー（生年不詳―一五五一頃）と出会い、日本布教の決意をした。ザビエルが初めて日本を知った時のことが、一五四八年一月二十日にコチンからローマの全会友に宛

てた書簡に次のように記されている。

「私がまだマラッカに居る時、ポルトガルの信賴すべき商人たちが、私に重大な報知をもたらしした。それは大きな島々のことで、東方に發見されてから未だ日も浅く、名を日本諸島と呼ぶのだという。商人達の意見によると此の島國は、印度の如何なる國々よりも、遙かに熱心にキリスト教を受け入れる見込みがあるという。何故かと言へば、日本人は学ぶことの非常に好きな國民であつて、これは印度の不信者に見ることのできないものだといふ」⁽¹⁾

ザビエルは一五四九年八月十五日に鹿兒島に着き、直ちに布教活動に着手しながら日本人を觀察して、日本布教の方針を検討していった。ザビエルが觀察した日本人、さらに布教と貿易に對する考え方は、次のような書翰に見ることが出来るだろう。「先ず第一に、私達が今までの接觸に依つて識ることのできた限りに於ては、此の國民は、私が遭遇した國民の中では、一番傑出してゐる。私には、どの不信者國民も、日本人より優れてゐる者は無いと考えられる。日本人は、總的に良い素質を有し、悪意がなく、交わつて頗る感じがよい。彼等の名譽心は、特別に強烈で、彼等にとつては、名譽がすべてである。……」

私は今日まで旅した國に於てそれがキリスト教徒たると異教徒たるとを問はず、盜みに就いて、こんなに信用すべき國民を見たことがない。……」

私は、一般の住民は、彼等が坊さんと呼ぶ僧侶よりは、惡習に染むこと少なく、理性に従うのを識つた。坊さんは、自然が憎む罪を犯すことを好み、又それを自ら認め、否定しない。此のような坊さんの罪は、周知のことであり、また広く行われる習慣になつてゐる故、男女、老若の區別なく、皆これを別に異ともせず、今更嫌惡する者もない。」⁽²⁾

このようにザビエルの日本に對する評價は高い。そしてザビエルは積極的に日本人を理解しようとした。日本

人の道徳性を高く評価し、布教の可能性を認めた。また日本語の習得にも努めた。

ザビエルは日本においてなすべき二つの主要な目的を持っていた。一つは日本の国王に面会してキリスト教布教の許可を得ることであり、もう一つは日本の大学で討論して、日本の宗教界の状況を知ることであった。

ザビエルはまず支配者の理解や許可を得て、それから布教を進めようと考えていた。そして布教と貿易を関係づけながら、現実的な日本への布教活動を展開していった。

(2) 巡察師ヴァリニャーノとルイス・フロイスが見た日本

ザビエルに続いて宣教師たちが続々と来日した。

イエズス会の巡察師ヴァリニャーノが総長に宛てて書いた、当時の極秘親展の報告書には次のような記録がある。日本の礼儀作法を知らなかった宣教師たちは、日本人から無礼者とみなされ、しばしば嫌われ、侮辱されもした。そこで宣教師は弁解して、「日本人のあなたがたは、私たちが、異なつた風習の中で育ち、日本の礼法を知らないのは、やむを得ないことだとお考えになりませんか」と言つたことに對して日本人は、次のように答えた。「その点では、あなた方に同情する。しかし一年や二年の間なら我慢するが、あなた方は日本に来てから、もう幾年も経っているのであるから、我慢することができない。なぜなら、あなた方が、日本の風習や礼儀を覚えなないのは、それを覚えようとしなないし、それがあなた方の氣に入らないからである。それは私たち日本人に對する侮辱であり、道理にも反する。なぜなら、あなた方は日本に来ていのである。それにあなた方の数は少ない。したがつてあなた方は当然、日本の風習に従うべきである。私たちは日本の礼法をやめることはできないし、あなた方の風習に従うべきでもない。あるいはあなた方が、日本の風習を覚えなないのが知力と能力に欠けているためであるならば、日本人はそれほど無能なあなた方の教えを受けることはないし、あなた方を教師とすべ

きではない。」

日本に多年存在した宣教師ルイス・フロイスも、日本と西欧の風習のちがいを六一一カ条も挙げて、小冊子にまとめあげている。その一つにこういう文章がある。

「われわれヨーロッパ人の間では、人を殺すことは恐ろしいことであるが、牛や鶏、犬を殺すことは恐ろしいことではない。しかし日本人は、動物を殺すのを見ると仰天するが、人殺しは普通である。ヨーロッパでは、別れる時や外から帰った時に抱擁するが、日本人は全くそういう習慣がなく、それを見ると笑う。……われわれは、落着いた厳肅な顔で挨拶するが、日本人は、いつも偽りの笑いで行なう。……われわれは履物をはいたまま家に入るが、日本ではそれは無礼なことであり、靴は戸口で脱がねばならない。」

(3) キリスト教と日本文化との対立点

こうして日本文化とのギャップに苦悩した当時の宣教師たちによつて建てられたキリシタン教会は、日本人と日本の社会的慣習に対していかなる対応をしたのであろうか。最初にヨーロッパのキリスト教の教義的な面と日本の当時の道徳意識との違いを見てみよう。

まず性道徳に關してであるが、カトリック教会では婚姻は七秘跡の一つである。しかし宣教師たちが直面した当時の日本社会は、このカトリック的婚姻観と真つ向から対立するものであった。ヴァリニャーノは一五八三年（天正十一年）の報告書の中で、日本人の奇異な風習として、正妻は一人であるが他に望むだけの妻を持つことができ、離婚を平気で行なうと記している。ヴァリニャーノはこれに対する解決策として、日本人が異教徒の時に行なつた婚姻は、結婚の永続性についての自覚なしに行なわれたものゆえに、無効とすべきである。日本人が婚姻の不解消性たるべきことを知らずに離婚しても、教会は別れた最初の妻のことを無視して、彼に洗礼を授け

ることを許すべきであると総会長に訴えた。

ルイス・フロイスによると、秀吉は多数の妻を持つことを許さぬ点の他は、自分はキリシタンの教えにことごとく満足していると語ったらしい。

苦悩の末、イエズス会士は日本布教の過程で、この婚姻の単一性についての掟をそのまま日本に適用することは断念した。それは当時の日本の婚姻の習俗と衝突し、布教の障害となることが予想されたからである。

しかしここで押さえておきたいことは、宣教師たちのあいだで布教方針に関して対立が生じていたことである。一五七〇年に来日し、イエズス会の第二代日本布教長であつたフランシスコ・カブラル（一五三三—一六〇九）は、来日一ヶ月後に宣教師会議を開いた。そして次の二項目を徹底させた。

① 日本のイエズス会員が日本の伝統・習慣を尊重して使用していた絹の着物の着用を禁止する

② 日本のイエズス会が日本・マカオ間の貿易に参加して収益をあげていた商取引を禁止する。

ポルトガル人カブラルは、ポルトガル国王の年金によって維持されてきた日本の布教事業は、ポルトガルとインド両管区の強い指導下におかれて、ポルトガル風の保守的で厳格な、しかもヨーロッパ人宣教師中心の植民地主義的布教方針が採用されるべきであると考えていた。ところがカブラルの植民地主義的な布教方策は成功しなかった。カブラルは大分に住み、九州地方に布教したが、日本人キリシタンとの間に多くの軋轢が生じた。

これに反し、京都周辺のキリスト教は成功し、進展していった。フロイスの後任として一五七四年から京都周辺の布教を担当したのはオルガンティノであつた。ザビエル以来の布教方針を尊重したオルガンティノは日本を理解し、日本に適応した布教方針を採用した。織田信長の保護もあり、京都に和風建築の教会である南蛮寺を建て、安土には信仰・道徳・修養などの全人教育を目的としたキリシタン学校であるセミナリヨを開設した。

停滞していた当時の日本のキリスト教界を改革したのが、先にあげたヴァリニャーノである。ヴァリニャーノ

はカブラルの方策を変更し、日本を尊重した適応主義を基調にした布教方針を打ち出した。セミナリオの設置、日本人聖職者の養成、日本人のイエズス会入会などを決めた。一五八二年には、伊藤マンショ・千々石ミゲル・中浦ジュリアン・原マルチノら四名の天正遣欧少年使節を伴って、一時日本を離れた。そのあとヴァリニャーノは、豊臣秀吉が一五八八年に公布した伴天連追放令に対応するために再び来日し、秀吉に謁見している。

その後禁教下でのキリスト教布教のための方針を決めて、一五九二年に日本を離れ、さらに一五九八年、日本巡察師として三度めの来日をする。それは秀吉の死から一六〇〇年の関ヶ原の戦いへの時期であった。その時は、宣教師間の対立の解消と禁教後の布教体制の立て直しをはかり、一六〇三年日本を離れる。

以上見てきたように、日本布教を成功へと導いていったのは、ザビエル、フロイス、オルガンティノ、ヴァリニャーノらのキリスト教の日本文化への順応政策をとっていった路線ではないかと考えられる。イエズス会の宣教師たちは日本の政治体制、社会秩序、身分秩序などを否定したのではなく、それに順応し、妥協することによって、摩擦を避けつつ日本社会へのキリスト教の浸透をはかったと考えてよい。そのやり方は、イエズス会に遅れて日本布教を開始したフランシスコ会から強い批判を浴びたほどであった。

(4) 日本側のキリスト教政策

イエズス会が日本布教を開始したのは、日本の近世封建制の時代だった。各地の領主が支配権を持っていた時期を近世封建制初期とし、豊臣秀吉が中央政権を握った後を近世封建制確立期と考えてみよう。

近世封建制初期にキリスト教への政策判断を下したのは封建領主である。したがって各地を支配した領主のキリスト教政策が、この時期のキリスト教にとって重要な要素となった。

イエズス会は封建領主に布教許可を得たうえで布教活動を進めていった。全国的には京都を重要な布教の目標

とし、ポルトガルとの貿易も布教と関係させた。封建領主にとつては莫大な利益をもたらす貿易は、大きな魅力であつた。貿易と布教活動に關係が見られたのは九州地方であつた。したがつて初期にキリスト教の布教活動が行なわれたのは九州と山口と京都近辺であつた。

初期権力の対キリスト教政策に見られるのは、現実的判断に基づいていたことである。キリスト教との関わりは、ポルトガルとの貿易や武器の獲得に有利に働いた。島津貴久や織田信長の対キリスト教政策はこの点から理解できる。

しかしキリスト教を取り込むことは、政策上有利に働いただけではなく、仏教勢力などの反キリスト教運動も引き起こした。このために政策を変更したのは島津貴久であり、大友義鎮は両者の調停をはかったが、そのため自らの政權を弱体化させた。逆に仏教勢力を弾圧したのが、大村純忠や織田信長である。

豊臣・徳川両政權が全国的支配權を確立したのは、キリスト教の伝來から三〇年から五〇年後のことである。それぞれの政權は、日本で布教活動を行ない、成長するキリスト教を觀察して対キリスト教政策を決定した。その結果、いずれの場合も反キリスト教政策となつた。これらの政權が、反キリスト教政策をとつた理由は、キリスト教が近世封建制支配体制に根本的に合わないと判断したからであらう。一つには、時として支配体制に順応しないキリスト教の自立性が考えられ、もう一つには、結束の固いキリスト教共同体への恐れがある。

しかしこれらの政權で、反キリスト教政策と鎖國政策が單純に結びついたわけではない。豊臣秀吉はこれらを區別している。なぜならばヨーロッパとの貿易は、大きな利益をもたらしたからである。

しかし徳川政權は鎖國政策を、島原・天草の農民一揆を契機に一気に完了させた。キリシタン取締りは、特に徳川政權によつてきびしく全国規模で行なわれた。そのために利用された寺請制度は、封建体制の民衆支配強化につながつた。

さらに徳川政権はキリスト教邪宗観を強調して、その取締りに民衆を取り込んだ。民衆はキリスト教邪宗観を受け入れて、政権の忠実な協力者となっていた。キリスト教邪宗観は、その後も長く民衆のキリスト教観に暗い影響を与えていると言える。

三、キリシタンになった日本人たち

(1) キリスト教の伝播

近世封建制初期にキリシタンになった人たちは、地域的には九州・山口と京都周辺に限られていた。

しかし、その社会層は封建領主、武士、医師および仏僧などの知識人、農民、漁民と都市に流入した貧民など、広い層から構成されている。その理由は、宣教師たちは、一方では封建領主や知識層などと接触をはかり、上からの布教を進めた。他方、地域住民や都市の貧民などに対しては、教育事業や社会福祉的な活動に取り組んだことによる。このような活動の結果、幅広い社会層から信者を獲得していった。

この時期の宣教師およびキリシタンたちは、日本の封建体制を尊重したが、キリスト教に基づく生き方と封建体制との間には、対立面も存在していた。しかし一面においては日本人がキリシタンになることによって、キリスト教への所属意識と共同体意識を持つようになり、ヨーロッパ世界との交流の媒介となったという側面もある。近世封建制確立期には、政権が禁教政策を実施したわけであるが、キリシタンの採った立場は三通りある。第一の立場はあらゆる階層に見られた棄教という立場である。第二の立場は領主や武士層に見られた追放と殉教と組織によるキリスト教の継承である。第三の立場は二〇〇年以上の禁教政策の間、キリスト教を継承した農民などの民衆である。彼らが隠れキリシタンとして禁教時代にキリスト教信仰を生き抜いていった唯一の人々であつ

た。

(2) 信仰を貰いたキリシタンと棄教したキリシタン

① キリシタン大名

封建領主でキリスト教信仰に生きた人物の一例として高山右近（一五五二頃——一六一五）がいる。高山右近は一五五二年頃、高山飛騨守ひたのさむらいの長男として摂津高山に生まれ、一五六四年、十歳くらいの時、父の勧めで洗礼を受けた。この頃はキリスト教に強い関心は持っていなかったようであるが、高槻城主になった一五七三年頃から熱心にキリスト教を学び、家臣や領民に布教するようになった。

織田信長の死後は豊臣秀吉に仕えたが、豊臣秀吉の武将の中から、高山右近の影響によって小西行長、黒田孝高たか、蒲生氏郷などの武将が洗礼を受けるようになる。

豊臣秀吉が九州を支配下に置いたあと、キリスト教の棄教に応じなかった高山右近は改易処分（領地などを没収すること）にされ、追放された。しばらく小西行長の領地であった小豆島あづまにかくまわれ、小西行長が肥後に移るとそこへ行った。そのあと、金沢の前田利家に仕えた。

徳川政権になり、キリスト教政策が厳しくなると、長崎からついにマニラへ追放され、マニラで大歓迎を受けて、まもなくマニラで亡くなっている。

高山右近にとってキリスト教は、よくわからない少年の日に父の勧めによって入信したものであったが、やがて自覚的な信仰者になり、一生をキリスト教信仰に生きるようになった。

近世封建制初期に九州・山口と京都周辺に限られていたキリスト教の分布は、近世封建制確立期になると、日本各地に広がっていった。キリスト教が広がった理由の一つに、キリシタン大名やキリスト教に好意的であった

大名の国替えがある。キリシタン大名蒲生氏郷は、伊勢から会津に移り、キリスト教に好意的であった福島正則は尾張から広島に移った。彼らとともに多くのキリシタンたちも移り住んでいった。東北や北海道に追放されたキリシタンもそれぞれの地でキリスト教を伝えた。

しかし徳川政権がキリスト教禁教政策を徹底させることによって、キリシタン大名たちの多くは棄教し、身の証を立てるために厳しい迫害をした。たとえば大村純頼は棄教したキリシタン大名大村喜前（むきまき）の長男であった。

② 民衆

領主や武士たちが棄教する中で、キリスト教を継承していったのは、農民や漁民などの民衆だった。二〇〇年以上の禁教と鎖国の時代に、民衆たちはキリスト教を継承していった。

民衆がキリスト教と出会った場の一つは、宣教師の医療活動であった。相次ぐ戦乱で財産を失った農民は、京都や山口などの都市に集まった。傷つき病める彼らに治療を施したのはキリスト教の宣教師たちであった。民衆はそこでキリスト教と出会った。ミゼルコルディア（医療活動などに取り組んだキリスト教の組織）やコンフラリア（共済的性格を持ち、キリシタン迫害下で信仰を守るための組織）などの組織によって病人を訪問して世話をし、食べる物のない人たちに炊き出しをした。

キリシタンの潜伏組織について、長崎の浦上の場合を見てみると、次のようなでき事がある。

「サンタ・クララ教会で門番や炊事などの雑務をやっていた孫左衛門は、教会が破壊されてから、中野郷の村に住んでいた。禁教が厳しくなって信者たちは逼塞（ひつさく）してしまい、隣同士でさえ、元はキリシタンであることを知っていないが、現在信仰を守っているかを尋ねることさえできない状態になった。信仰の事などおくびにも出せないようになってしまった。「これではキリシタンは絶滅してしまう」と孫左衛門は心配した。ある日、意を決して岡に住む友人の七郎左衛門を、浦上川の梁（やな）の白魚漁に誘い出した。梁の白魚は徳川時代まで、上方にも知

られた名物であつた。孫左衛門はしかし、なかなか信仰のことが口に出不せない。二、三日、話を切り出せないままに過ぎてしまつた。ところが七郎左衛門も同じ思いにさせていた。何日目かに孫左衛門が口を切ると七郎左衛門は双手をあげて賛成した。クリシタンの信仰を保持するための組織をつくろうというのである。

二人は極秘裡に村人たちを説き廻り、ついに全村民を團結させるのに成功した。浦上には、クリシタンの地下組織ができた。まず帳方やうかたが一人いて、日繰ひぐりを所持していて、一年中の祝日や教会行事の日を繰り出し、また祈りや教義などを伝承する。

浦上山里村五郷（馬込郷・里郷・中野郷・本原郷・家野郷）のうち、馬込郷以外の四郷がクリシタンであつた。各郷に水方みづかたが一人いる。帳方は祝日や祈り・教義を水方に伝え、水方は聞役に伝える。聞役が一戸一戸の信者を掌握していてそれを各人に流した。洗礼を授けるのは水方の役目になつていた。

こうして帳方・水方・聞役という指導系統が出来上つた。二五〇年に及ぶ長い間、一人の神父もいないのに信者たちが信仰を伝え得た理由の一つはこの組織の故であつた。外海地方・五島・平戸・生月地方いさぎのクリシタンたちもこれに似た組織をもつていた。

初代帳方には孫左衛門が推された。帳方は選挙によるものであつたが、代々孫左衛門の子孫が推薦され、七代目の吉蔵に至つた。吉蔵は、安政六年（一八五九）の浦上三番崩れと言われる検挙事件で入牢、殉教した。その後、間もなく、浦上教会の復活が行われ、吉蔵を最期にこの組織は消滅した。⁽⁴⁾

四、隠れクリシタンの心情と行動

(1) 隠れクリシタンの成立背景

キリシタン弾圧の中で生き残ったキリシタンは背教するか、地下に潜伏するか、二つに一つの道を選ぶしかなかった。

背教した者は、本人も類族も「類族改」制度によって毎年厳しい監視を受けつづけた。地下に潜伏した者は、全国に掲げられた懸賞訴人の高札、五人組連座制による相互監視と密告、往来手形（仏寺の檀徒であることと旅行目的を書いた証明書）などによって取締りをうけ、踏絵、寺請制度など数々の検索制度に順応することを強いられた。

迫害の時代に、キリシタンたちは秘密の集団組織をつくり、仏教、神道をかくれみのとしながら信仰を守り伝えた。殉教の時代に地下に潜伏していたキリシタンが、明治以後もカトリックにならずに、今日でも長崎などに存在し続けるいわゆる「かくれキリシタン」と呼ばれる信仰集団もある。かくれキリシタンの宗教は仏教、神道、土俗宗教とキリスト教との混合的な独自の宗教となっている。しかし当時の政治社会の規制の中でできる限り、キリスト教の宗教的純粋さを維持し続けた信仰集団もある。たとえば一八六五年、フランス人によって長崎に建てられた大浦天主堂における信徒発見、キリシタン復活を呼び起こす原動力になったりしたのもこのような信仰集団である。一八六五年、大浦天主堂のプチジャン神父は、ある日天主堂を訪れてきた十数名の日本人信徒が、七代続いた潜伏キリシタンたちの末裔であることを発見して驚いた。

(2) かくれキリシタンの信仰形態

キリシタンたちの誰かが死んだ場合、檀那寺の僧が来て読経し、死体にキリシタンのないものがないことを確認してから、その立ち会いのものと納棺した。キリシタンも表面上はどこかの寺の檀徒になっており、宗門人別改帳は踏絵の台帳にもなり、戸籍の役目も果たしている。

キリシタンたちは、僧侶が帰ってから棺をあけて頭陀袋や六文銭をつり出して、キリシタンのおみやげである赤い布を持たせて葬った。赤い布は殉教者たちの血の色を象徴しているらしい。

踏絵の時は、たとえば浦上のキリシタンたちは子どもたちに「足がさわらんど軽く踏めよ」とさとしている。踏絵のあと、家に帰ってから罪のゆるしをえるための祈りを唱えている。

家には仏壇を設けてはあるが、仏像にはキリストやサンタ・マリアなどの名をつけ、それぞれのイメージを求めて祈り続けた。

(3) かくれキリシタンに見られる仏教とキリスト教の混合形態

現在でもカトリックにならずに、かくれキリシタンの信仰を捨てずに守り続けている人々が、長崎には数多く見られる。彼らの家の中では、奥座敷には仏壇を、居間には神棚を、床には天照皇大神の軸を、カマドには荒神さまを、井戸には水神を、戸口にはいろいろなお札をというように、仏も神も民間信仰もいっしょに祀られている。

目につくように作られた表神は、偽装であつた潜伏心理をこえて、信仰要素の中に織り込まれてしまつてゐる。たとえば位牌には、

(正面) 松川吉祥院信女

サンタマリヤ 之墓

(裏面) 松川 ヨシ

というような形で戒名とキリシタン名とがいっしょに位牌に記されている。

さらに地下組織を作つて洗礼その他の儀式を執行し、オラシヨ（カトリック教会の公式の祈り文）を伝承し続けた。

しかしこれら潜伏キリシタンたちは、伝承した物と儀式の伝統を異常に重視しながら、それを通じて發揮すべき信仰の精神は、年を経るとともにうすれ、変質していった。これらの聖具と儀式の精神を説明し、指導する宣教師のいなかった長い年月のことを考えれば仕方のないことではある。

仏壇、神棚も祖先の教えとして、キリシタンの信仰生活の中で納戸神（キリシタンの画像類をひつや箱に納めて納戸に隠しておく）として、置かれるようになった。はじめ隠れミノとして用いられたものが、やがて大切な信仰要素となり、混合的な宗教的形態ができた。

現在も存在しつつあるかくれキリシタンの人たちは、明治初年まで七世代二五〇年間、その生活環境の中でキリシタンが可能な限り正確に守り続けたキリスト教信仰を、さらにその後三代一〇〇年間のあいだに、仏教や神道とキリスト教を混合させる形で変容させてしまっている。それはこの一〇〇年のあいだ、仏教や神道はもはやかくれミノではなくなっていたからである。明治以後、現在まで存続し続けているかくれキリシタンたちは、神仏習合の日本人的宗教風土の中に埋没していったとも言える。

五、日本におけるキリスト教伝来の意味

以上述べてきたように、日本に初めてキリスト教が伝来した頃の権力者側と民衆の反応、宣教師たちの日本人に対する対応の仕方を見てきた。

種子島への鉄砲伝来が一五四三年、フランシスコ・ザビエルの鹿児島上陸は一五四九年のことである。こうして、日本は初めてヨーロッパ文化と接触したわけである。

当時の宣教師たちの記録を見ると、ヨーロッパの精神文化より物質文化の方に日本人の関心は向かっていったようである。宣教師ザビエルは鹿児島で仏教僧侶や民衆の迫害を受ける。その後、みやこに上つて天皇に拝謁しようとするが、あまりに貧しいみなりのザビエルに対して、献上品を持っていないという理由で追い払われた。比叡山に登つて天台座主に会おうとすると、異国人であるということとわられてしまう。日本人の支配者たちの求めていたものは、西洋の物質文化である物品や通商であり、キリスト教をはじめとする西洋の精神文化ではなかった。そこでザビエルは方針を変え、平戸に入港したポルトガル船から得た豪華な衣服に珍しい西洋の品々を携えて、大内義隆のところに参上したところひじょうに満足され、歓迎された。キリスト教の布教も許可された。宣教師フロイスはこう書いている。「神の道を開くには、まず浮世の欲望を満足させて誘惑しなければならぬ」。

このように十六世紀末の日本は南蛮文化が流行したが、それが日本人の内面にどこまで浸透していったかは不確かなものである。

織田信長と宣教師との関係は、概してひじょうによかったと考えてよい。これは信長が仏教諸宗派に激しい憎悪を持っていたことによるだろうが、キリスト教に対しては寛容であった。

豊臣秀吉もヨーロッパからの品々や風俗には、大きな関心を持っていたものではあろう。しかしキリスト教の弾圧を始めたのは秀吉であった。なぜ秀吉がキリスト教を弾圧したのかははっきりとはわからないが、キリシタンおよび宣教師たちの背後にあるスペイン王国は、布教を口実に権力を手に入れようとしているという話を耳にしたことにもよるらしい。それでも秀吉は貿易と舶来品輸入は奨励している。

徳川家康は、外国との通商、外国からの技術導入にはひじょうに熱心だった。家康は朱印船貿易を奨励した。しかし家康はキリスト教に対しては、完全に否定的であった。十七世紀初頭の全国のキリスト教徒の数は七〇万人に達したと言われている。これに対して家康は「いかなるかたちにおいても、キリスト教が日本で布教されることは好ましくない」と言っている。家康にとってはスペイン人やポルトガル人の布教の背後には、何か政治的意図があるのではないかという疑いが常に頭の中にあつたらしい。カトリックに対するプロテスタント国イギリスやオランダから来た外国人の側近たち、ウィリアム・アダムス（三浦按針）などのざん言がその疑いを深めていった。

秀忠、家光の時代に入つて、キリシタンの取締りと貿易の管理は厳しくなつていったが、外国との通商そのものは最後まで承認されていた。ポルトガル人の全面的追放に踏み切つたのは、島原の乱が起つてからであつた。これほど宣教師やキリシタンを弾圧した徳川幕府も、貿易品だけは確保したかつた。だからこそ布教に関心を示さないオランダ人に対しては、貿易を許可している。

これほど外国貿易に執着した徳川幕府が、キリスト教を嫌悪する理由はどこにあつたのだろうか。それはキリスト教徒が封建体制の集権化にとつて、重大な障害となる可能性があると考えたことによるのだろうか。その恐れが島原の乱で的中した。しかし見方を変えてみれば、島原の乱は、封建体制の中にあつて、キリスト教徒の信仰が恐るべき抵抗力を発揮した珍しい現象とも考えることができる。そもそも島原の乱は、キリスト教徒の反権力闘争として始まつたものではなく、苛酷な年貢取り立てに対する百姓一揆が発端であつた。当時、一揆は他の地方でも起きている。しかし単なる一揆もキリスト教信仰に裏づけられると、これほど恐ろしい力を発揮するといふことを痛感した徳川幕府は、「鎖国」に踏み切つたのだらう。

さらにキリスト教という思想は、権力者たちにとって好ましくない思想や教えであつた。第一にキリスト教

は地上権力の否定の思想を持っている。第二に根本的には神の前での人格の平等を説いている。地上の君主が天上の主である神かという二者択一的な状況に迫られれば、信者たちはきつぱりと地上の君主の権力を否定したのである。このような超自然的な神への信仰を説くことが、権力者たちにとってはおもしろくなかったのである。

しかしよく考えてみると、当時のカトリシズムが全く平等な社会を形成していたというわけでもない。当時のカトリシズムは、ヨーロッパの階級社会に根づいた思想を含んでもいたから、むしろ日本の封建社会の秩序を是認していたとも言える。宣教師たちも日本の習俗に順応する妥協策をとっていた。

このように考えていくと、キリスト教思想が、権力者たちにとってよくないものであった本当の理由はよくわかっていない。秀吉や家康らがキリシタン弾圧を行なった時、キリスト教思想に対置させたのは神国思想であった。一五八七年の禁令第一条には「夫れ、日本は元是れ神国也。陰陽不側之を名づけて神と謂う」と書いてある。いずれも起草者は仏僧であるが、秀吉、家康の心情もここにあると言つてよいだろう。いずれにしても当時の日本の権力者たちにとつてキリスト教は都合のよくない宗教であつたということなのであらう。

まとめ―世界史の中の日本

十六世紀後半から十七世紀前半のいわゆる南蛮文化とキリスト教到来の時期におけるヨーロッパの日本論がいくつか残されている。

すでに見てきたようにザビエルは、一五四九年鹿児島で「今までの接触によつて識ることのできた限りに於ては、此の国民は、私が遭遇した国民の中では、一番傑出している。私には、どの不信者国民も、日本人より優れている者は無いと考えられる。」と言つている。日本は布教の対象としては、ザビエル以来、大きな期待を寄せられた。日本人の資質の優秀性については、ザビエル、ヴァリニャーノはじめ多くの宣教師が強調している。

イエズス会士たちの目に映った日本は、天下統一の過渡期の戦乱時代であつたことも重なつて、王宮の荒廃、下剋上、人々の好戦的性格、残忍さなどが目にとまる。しかし反面、日本人の忍耐強さ、勤勉さ、行儀正しさなどは賞賛されている。

だが十六世紀後半のキリスト教布教の成長期と十七世紀前半におけるキリスト教迫害の時期のふたつの対称的な出来事は、ヨーロッパ人に強烈に印象づけられた。前半のオブティミズムと期待が大きかつただけに、後半の事件の衝撃が深かつた。

秀吉のキリスト教弾圧の直後から、日本における殉教の報告はヨーロッパで印刷され始めている。そして一六三九年の鎖国によつて日本布教の門が完全に閉ざされると、日本は徹底的な方法で残忍にキリスト教徒を迫害した国として記録されるようになる。十八世紀のイギリス人ダニエル・デフォーは、『ロビンソン・クルーソー』第二部の中で、日本人は「虚偽的で、残忍で、人を裏切る民族だ」と書いている。

こうして日本は黄金の島ジパングから信仰の勝利した国へ、そしてまた一転して信仰を迫害した野蛮で暗黒の国へと、ヨーロッパ人に対する日本のイメージは大きく変わつていったのである。このイメージは鎖国時代が終つたのち、再び日本が接触したヨーロッパ人、アメリカ人の頭の中にも記憶されていたはずである。十九世紀なかばのイギリス公使ラザフォード・オルコックは次のように書いている。「水平線のはるかなる果てに、一群の島が現われてきた。そこには、明らかに、かつてはグロテスクで野蛮な人種が住んでいた。」かれらは、外来者を手厚くもてなすどころか、かれらが否認する信仰をもっている外来者を迫害することに熱中していた。かなりはつきりしたのは、これぐらいのことだつた。そして、その他のことは漠然としていた。」（『大君の都』山口光朝訳）

明治以後、一〇〇年以上の年月を経た日本に対して、欧米人の持つ日本観はどのくらい変化したのだろうか。

経済大国日本と言われながらも政治、外交問題に関してはあまりよい評価を受けていない現在の日本人の精神構造は、ヨーロッパの物質文化は受け入れようとしたが、精神文化に対しては否定的であった南蛮時代の日本の権力者たちの考えとそれほど変わらないような気がするのである。

〔注〕

- (1) アループ神父・井上郁二訳『聖フランシスコ・デ・ザビエル書翰抄』上 二六五頁
- (2) 同 下 二六頁、二八頁
- (3) 『切支丹土記 九州編』 一五九—一六一頁

参考文献

- ・フロイス、松田毅一訳『日本史』全一二巻 中央公論社 一九七七—七八年
- ・ヴァリニャーノ、松田毅一訳『日本巡察記』 平凡社 一九七三年
- ・アループ神父・井上郁二訳『聖フランシスコ・デ・ザビエル書翰抄』上・下巻 岩波書店 一九四九年
- ・姉崎正治『切支丹宗門の迫害と潜伏』 日文館 一九二五年
- ・古野清人『キリシタニズムの比較研究』 三一書房 一九七三年
- ・片岡弥吉『日本キリシタン殉教史』 時事通信社 一九七九年
- ・五野井隆史『日本キリスト教史』 吉川弘文館 一九九〇年
- ・アンジェラ・ヴォルペ『隠れキリシタン』 南窓社 一九九四年
- ・宮崎賢太郎『カクレキリシタンの信仰世界』 東京大学出版会 一九九六年